

様々な連携をめざして

動物園はお客さまに動物展示やふれあいサービス等を提供し楽しんでいただく場ですが、広い意味では他の様々な施設と有機的につながり連携することでより効果的に機能する都市装置とも言えます。こうした考えを背景に、大森山動物園は運営、経営方針の一つに様々な施設や機関などにつながり、連携で地域に根を下ろし、当園だけではできない様々なことに挑戦していきたいと考えています。これまで、企業や農家、地域の秋田公立美術大学(旧秋田公立美術工芸短期大学)や高校、地域で組織された淡水魚研究会など、様々な連携を進めてきました。今回は新たに始まった隣接する水族館と連携した「日本海 クラゲ・イヌワシ・シロクマライン」と、地域の秋田市立浜田小学校とともに歩んだ牧草栽培の2つ話題をお届けします。(園長 小松 守)

3園館連携

飼育展示担当 主席主査 宇佐美 均



3園館連携協定書への調印式風景

平成25年9月1日、大森山動物園の40周年事業を記念し、新たな取り組みが始まりました。「東北日本海動物園・水族館連携」、愛称は「日本海 クラゲ・イヌワシ・シロクマライン」です。

これは、東北の日本海に位置し、野生動物の飼育展示を行っている施設が連携・協力し、各施設の賑わい創出や地域の活性化、飼育技術の向上等を推進することを目的とした取り組みです。

現在、山形県の鶴岡市立加茂水族館、秋田県の男鹿水族館GAOと秋田市大森山動物園の3園館が連携し、各施設で専用のPRブースを設け、パンフレット等の常設やタイムリーな情報を掲示するほか、専用ホームページも開設し3園館のイベント情報や魅力等の情報発信を積極的に展開したり、スタンプラリーを行い、集客や人材交流による地域の活性化につなげるイベントも開催しています。

また、お客さまの利用実態を分析するためにアンケート調査も行い、居住地や各施設の利用日、ホームページ利用状況等の情報を収集し、よりお客さまの動向に即した効果的なPRやサー

ビス展開に役立てています。

今年度スタンプラリーの結果では、6月に加茂水族館をスタートしたかたが最も多く、3園館全て周り終えた日数では、約3ヶ月間を要したかたが多数でした。これは、加茂水族館が6月にリニューアルオープンし、その後、夏休み等を利用して他2施設を訪れたものと思われ、短期間で全てを利用するより、周辺の観光も含め一施設に十分な時間をかける利用傾向が読み取れました。

賑わい創出への取り組み以外では、アシカの飼育管理とトレーニング手法等について、各施設の海獣類担当による研修会を開催し、情報交換や人材交流も行っています。また、希少淡水魚の保全や展示に関する研修会も計画し、3園館が持っている様々な技術の共有についても協力関係を深めたいと思います。

今後も、飼育技術の連携を含め、新たなPR手法やイベントを検討しながら各施設と地域の活性化につながるよう積極的な連携を推進したいと考えています。



専用ホームページ



専用PRブース

浜田小学校との連携・スタックス共同栽培

飼育展示担当 主査 山上 昇

1999年から秋田市立浜田小学校3年生を対象にスタックス栽培を続け、2014年で16回目となりました。この活動のきっかけは、ゾウなどの草食動物の糞を利用し、牧草を育て、動物に食べさせる「自然循環型リサイクル」をもっと広く知ってもらいたいという動物園の思いと同年から「総合的な学習の時間」の研究に取り組み始めたばかりの浜田小学校の思いが一致したことです。



播種作業

スタックスとは、飼料用トウモロコシの種類で、成長が早く、播種後約1ヶ月半で1m程度の草丈となります。冷涼な気候でも成育は良く、寒高冷地での収量がもっとも高く、栄養価においても糖分、蛋白質が豊富で、動物の嗜好性が大変良いとされている飼料用作物です。

皆さんが想像する畑仕事は、ただ種を蒔き、成長した食物を収穫すれば良いというのではなく、土作りに始まり、種蒔き後の雑草取り等、やらなければならないことが多いということではないでしょうか。

連携元年となった1999年は、種蒔きは順調に行いましたが、成長する牧草の観察の傍ら雑草取りに苦戦し、収穫時には、子どもの背の高さ以上に成長したスタックスを目の前に草刈り鎌を片手に持ち、悪戦苦闘しながらやっとの思いで収穫していました。どの子も「草刈り鎌」初体験で、使い方を説明したものの、見ている方が緊張するほどのぎこちなさだったのが思い出されます。毎年、体験する子どもは15名前後と少人数ですが、個性豊かで、動物園職員とのコミュニケーションを楽しみながら、汗だけで頑張っています。

あれから時が経つのは早いもので、今年で16

回を数えました。対象は、3年生のままですが、子どもたちの中には、兄弟・姉妹で体験した人も年ごとに増えています。中には、体験前にもかかわらず、大まかな作業の流れも知っている子どもがいて、短いですが歴史が感じられます。その分、課題もいくつか挙げられます。ここ数年、先生がたから出てくるのが、子どもたちに「おいしいとこ取り」ではなく、食物栽培の原点である畑作りから体験させたいという思いです。確かに、これまでは、種蒔き前の準備は、動物園側で行っており、子どもたちは、種蒔きや収穫、その後ゾウが食べているところを観察する「喜び」部分だけ体験していたのが現状です。これについては、私も同意見であるため、浜田小学校とのスケジュールを調整し、課題を克服しながら食物栽培を継続していきたいと考えています。



収穫作業



運搬



餌やり体験